

# KINO 徒然通信

2025. 9

みなさまへ

暑さもおさまってきて過ごしやすい季節になってきましたね、いかがお過ごしでしょうか。キノ33周年Tシャツも出来上がり好評発売中です。

ただ今上映中の「遠い山なみの光」では皆さん様々な感想や疑問など入り乱れて、これはこうなんじゃないか、というような独自の発想をされたり、どんどんミステリーの世界は広がってゆくようです。本当は何があったのだろう？そんな真実にたどりつくたくて、考えれば考えるほどいろいろな道筋が見えてきて、登場人物一人一人に思いを寄せてゆき、もっと知りたいと思う。感動の行きつくその先へと導かれるからなのでしょう。今までの価値観が覆された時、それでも過去の価値観から逃れられない人。新しい時代を生きたい、深い傷を負ったからこそ変わりたいと願う女性たち、そこにたくさんの希望をみる。この作品は個人の小さな物語を語りながら実は大きな問題に触れるように導かれているような。「1952年の長崎、1982年のイギリス。現代への架け橋をどう作るか。それを起点に原作の何を残し、何を变えるのかを決めた」と石川監督。それは今を、未来を生きるひとたちへの、異なる世代への大切なバトンのように思えてきます。9月26日(金)には石川慶監督がお越しになり上映後のゲストトーク&ティーチインを。ご覧になったかたはお聞きしたいことがいっぱいですね。

さてこちらは場内からは大きな笑い声が聞こえてきて嬉しくなります。呉美保監督の最新作「ふつうの子ども」。「10年振りですね！お元気そうでよかった！」と8月の先行特別上映でいらした時の第一声。本当にお久しぶり、私たちは美保監督がまだ学生で卒業制作の作品を芦別の映画学校に出品した時が初めての出会い。そこで校長先生を務めた大林宣彦監督のもとでスタッフとして映画制作に関わるようになり、修行を積んで独立した方なのでずっと応援してきました。今も編集には恩師・大林宣彦監督からの教えを元に取り組んでいて、今回の作品も撮影された映像と録音された音のばらばら編集でよりベストなものに近づけるため、地獄のような日々だったと。でもこれだ！と思った瞬間にはすべてが報われた気持ちに。自身に子どもが生まれ、日々と格闘しながら体験し発見した「ふつうの子ども」なのだ。きっと大林監督、よくやったと喜んでくれるよ、という「だといいな」と言って「これから少し休憩してまた頑張る、また来ます」と言って5歳のやんちゃなお子さんといっしょに帰って行かれました。

映画館はお客さまに映画を届ける場であると同時に、作り手が新たな作品に取り組み、届けるための場でもあるのですね、なんだか嬉しくなってきます。秋には三宅唱監督の「旅と日々」が、「揺さぶられる正義」、緊急上映「非常戒厳前夜」などドキュメンタリーも充実、20年ぶりの「リンダリンダリンダ」にキノの青春を感じたりしています。

シアターキノ支配人 中島ひろみ